

集団内における重い気分の表明とその伝達

—フリースクールでのエピソードから考える—

生 越 達

目 次

はじめに

I フリースクールで起きた気分を巡る一つのエピソード

II エピソードの解明：言葉の意義を超えた気分の表明の伝達力

(1) 漏れ出す気分の共有

(2) 「伝達」としての気分

III 自己形成と場の雰囲気を感じ受するということ

(1) 気分の感受としての「公共性」

(2) 自己論としての気分

おわりに

はじめに

子どもたちの存在について考えようとするとき、彼らの自己存在が一つの解明の焦点として浮かび上がってくるように思われる。子どもたちの自己形成が困難になってきていること、つまり自己の存在が希薄化していることについては多くの先行研究で指摘されている。

だが、どうしてこうした自己形成の困難が生じているのだろうか。価値多様化時代が訪れ、社会の「押しつけがましき」はずいぶん弱くなったと言われる。子どもたちは様々な縛りから解放され、自由に生きる条件は整ったようにも思われる。そして自由になれば、伸びやかに自己を形成することもできるようになると考えるのが自然であろう。

しかし事態はそれほど簡単ではないことを子どもたちの実態が示している。「自由」が広がった結果、子どもたちの「自己の肥大化」や「自己中心性」¹⁾が進行し、彼らにとって、すべては自己との関係のなかでしか捉えられなくなり、つまり他者が世界から排除され、他者の風景化が生じる。規範意識の低下と言われていることの根底には他者、あるいは他者との出会いの喪失がある。その結果、子どもたちは「誰にも迷惑をかけなければ何をしてもかまわない」といったことを公言するようになる。「自己の肥大化」と公共性の喪失は、同じ事象の裏と表なの

である。

そしてまた、他者を自らの世界から排除することは、他者とかかわりながら自己を育てていく機会を奪われてしまうことを意味する。こうして、「自由」が、自己を伸びやかに育んでいくことを阻害するという逆説が成立するのである²⁾。

「自由」になった子どもたちは、むしろ他者と向き合うこと、対話することを恐れるようになってきている。他者と出会わないように他者に「同調」し、他者を「風景化」する。とくに他者への「同調」は場の雰囲気と深くかかわっている。子どもたちは場の雰囲気（ノリ）に敏感に反応して、ノリの悪い他者を排除しようとする。ノリのなかで生きている子どもたちにとって自らの存在を守るためには同調的雰囲気が必要なのだが、ノリの悪い他者はその同調的雰囲気を壊すので、彼らにとっては自分の存在を守るためにノリの悪い他者を排除することが必要なのである³⁾。あるいはノリの悪い他者を排除することを通して同調的雰囲気を高めることができる。こうして、子どもたちは場の雰囲気を感じ受することに重きをおいて生きているのである。

では場の雰囲気を感じ受とはいったいどのようなことなのだろうか。本稿においては、フリースクールで私と子どもたちの間に生じた一つのエピソードをとりあげて、場の雰囲気を感じ受ということはいったいどのようなことなのかを「気分」の「表明」や「伝

達」ということをキーワードに明らかにし、さらにはそこから自己形成についての示唆を得たいと考えている。

I では、まずはひとつのエピソードを紹介したい。私の言葉に反発する子どもの気分がフリースクールを支配してしまい、他の子どもたちをも同じ気分にしてしまうというエピソードである。子どもたちの自己がそれほど他から切り離されたものではなく、場を介してつながっていることを示すエピソードである。II では、そのエピソードを私なりに整理して、エピソードのポイントは何かについて明らかにする。さらにハイデガーの思索の助けを借りて分析を進める。そこでは、気分が私たちの内面領域を超えて漏れ出し、そして他者をも支配すること、その意味で自己の根底には内面領域を超えたある種の共同性があることを明らかにしていきたい。そしてIII では、場の感受とはいったいどのようなことなのか、そしてまた、そこから一般的に子どもたちの自己存在について示唆を得られることは何かについて考えることにしたい。

I フリースクールで起きた気分を巡る一つのエピソード

エピソード：嫌な気分の表明と、その雰囲気には耐えられず部屋を飛び出す子ども

エピソードの背景

そのフリースクール⁴⁾には、そのとき10人ほどの子どもたちが通ってきていた。もちろん、フリースクールには時々しかやってこない子どももいるのだが、エピソードの当時は、ほとんどメンバーは固定していて、まれに他の子がやってくるような状況だった。そしてエピソードの起こった日も、いつものメンバーのみがフリースクールにやってくるだけだった。

子どもたちは、ほとんどが高校生で、仲はよく、まとまってみんなで行動をすることが多かった。彼らは同じ通信制高校に通う友人でもあった。みなフリースクールでは明るくふるまっており、自分の思いを大切に生活しているように見えた。

私は週に1回の割合で、彼らとかかわっていたが、彼らは私に対しても遠慮はなく、自分の意見を

きちんと言ってくる。たとえば午前中は学習の時間になっていたので私は彼らにレポート⁵⁾をやるようにうながすことも多かったが、彼らはトランプなどをしていてそれをやめようとしなかったことも多かった。

子どもたち同士の関係においても、誰かから、これやろうよという提案があっても、それは嫌だとか、これがやりたいだとか自由に意見を言える雰囲気であった。

だが、私自身が子どもたちに何でも自由に言えるかということ、どこか気を遣っている自分に気づくことがある。ただ、私自身、子どもたちの何を恐れているのかはよくわからなかった。子どもたちは、私のことを認めてくれているように思っていたし、彼らをからかうようなことを言っても柔らかく返してくれるようなことも多かった。

また、エピソードにでてくるA君は高校1年生の数学の得意な子どもで、その子の家をメンタルフレンド(家庭教師)として訪れたりしていたし、私のことを慕ってくれている部分もあった。ただし、私に対して自分の気持ちを話したりするようなことはほとんどない子どもではあった。彼はゲームが得意で、トランプなどをやっても勝つことが多かった。

Bさんは、やはり高校1年生で、フリースクールではいつも明るく、男子・女子問わず、誰とでも仲良く話をする子どもだった。またいつも真面目に作業をすすめる、素直な子どもだった。

エピソード

その日は、新聞づくりをする日だった。フリースクールでは、月に一度新聞を発行していた。

そのフリースクールでは、曜日ごとに午後は何らかの活動をして過ごすことになっていたが、運動や音楽等の活動に比べ、新聞はもっとも子どもたちにとってやりたくない作業であった。そのため、毎週一度新聞づくりの時間がとられていたのだが、実際にはみんなでトランプなどをして過ごすことも多く、私はそのことを黙認し、私自身もトランプに入ってもらって過ごすこともあった。だが、その日は、どうしても新聞づくりをしなければ月一回の発行ができなくなってしまう状況だったので、私は普段よりも強く、「先に新聞を作ってしまった、そのあとトランプをやろうよ」と勧める。

他の子どもは、あまり乗り気ではないものの仕方ないかなといった感じで新聞づくりをやり始めようとするが、A君は普段から新聞づくりが嫌いで、その日もナポレオン（トランプ遊戯の一つ）をやりたから嫌だと主張する。

彼のこうした主張はいつものことで、「ともかくそんなめんどくさいことはやりたくない」というのが、いつもの彼の言い分であった。私はこうしたA君を放っておくことができず、何とか新聞づくりをみんなでやりたいと思い、粘って勧誘しつつも、A君の言い分も認めなければと思い、「少しでもいいから新聞づくりをやって、そのあとナポレオンをやればいいじゃない」などと話しかける。

こうしたA君と私のやりとりを他の子どもたちは聴いていたが、はじめのうちは、新聞づくりを嫌がることもなく、かといって積極的にやろうと仕切ってくれることもなく、みんな中立的な立場にたって静観している。

私は何度も繰り返しA君を誘った。できるだけA君の言い分を聞き、納得してもらって新聞づくりに参加してもらいたいと思っていた私は、「どうして嫌なの？嫌な理由があるならば言ってみて」とか、「やろうよ。みんなでやったほうがいいじゃない」とか、A君に次から次へと言葉をかけていた。私としては、A君にできるだけ寄り添って彼の思いを受け止めた気持ちでいた。しかし、A君は頑として言うことを聞かない。

そのうち、A君の発言の仕方が「感情的」になってくる。「感情的」といっても、A君の怒りが私に直接的に伝わってくるといった感じではなく、彼の言葉がその場の雰囲気をもんよりと重たくするように空間に漂うといったふうであった。彼は決して怒鳴ったりすることはないのだが、A君の重たい気分がその場に伝染したかのように私も重たい気分になる。

私は、それで、その場の雰囲気を何とかしなければと焦るが、そうした雰囲気がその場を支配することを止めることはできない。とのとき、突然、Bさんが、「こういうのって最悪」と言って、部屋を出て行ってしまった。

Ⅱ エピソードの解明：言葉の意義を超えた気分の表明の伝達力

（１）漏れ出す「気分」の共有

なぜ、Bさんは、「こういうのって最悪」と言い、部屋を出ていかなければならなかったのだろうか。何が、Bさんをいたたまれない気持ちにさせたのだろうか。

Bさんは、毎日きちんとフリースクールに通ってきていて、すでにその場所にも慣れていて、A君をはじめとする他の子どもたちとも仲良くなっていて、いつも一緒に活動している。そして、その日も、そして新聞づくりの話をするまでは、いつもと変わらず、明るく過ごしていた。また私が新聞づくりの話をしたときにも、それを自然に受けとめているように見えた。

ところが、A君は新聞づくりに反対する。その反対は、理路整然とした反論ということでもなく、A君の否定的感情がその場をとおして直接伝わってくるといった感じを与えるものだった。そこにいるみんながいつのまにかA君の否定的感情を共有させられてしまったのである。

A君の言葉の裏に、理性の内に抑え込むことのできない否定的感情が見え隠れする。その感情は、「新聞づくりは嫌だ」という新聞づくりという対象への嫌悪感の表明としても整理しきれないし、またそうした作業を強いる私への怒りとしてとらえることもできないものだった⁶⁾。

つまり、A君は特定の対象への感情として捉えきれない何かを私たちに伝えていた。対象を超えている感情的なものを、ハイデガーは「気分 (Stimmung)」という概念で表している。つまり、A君の「気分」がその部屋に浸透し、その場にいる他の子どもたちをも支配してしまうことがあるのだということを、このエピソードは示していることになる。気分は、数量化や対象化、客観化することができないために、単に主観的なものとして排除されることが多いのだが、このエピソードを理解するためには、気分注目せざるを得ないだろう。

A君の気分が、他の子どもたち、したがってBさんの気分をも侵し、A君と同様の気分陥らせる。もしA君の新聞づくりへの反対がはっきりとした理由をもった理性的反対で、新聞づくりという対象に

限定した反対であったり、また、新聞づくりという提案をした私という対象に限定した怒りの感情の発露として受け取ることができるものであったならば、BさんにとってA君の反対は自分にかかわることではなく、A君と私の一連のやり取りに対してBさんは傍観者でいることができたのだろう。

ところが、A君の反対はそうした性質のものではなかった。嫌な雰囲気私が私とA君の間を超えて部屋全体に充満してしまう。A君の気分がそのまま私にも共有され、そしてBさんにも共有される。私自身も、A君の言葉が私とA君の間の出来事ではなくなり空間を支配してしまっていることに焦りを感じ、だが私もその気分支配されてしまっているがゆえに、重たい気分になり、そのなかで身動きがとれなくなってしまう。

もはやA君の言葉の意義そのものが問題なのではなく、その言葉を支配している気分が問題なのである。むしろ言葉の意義は、その気分のなかで、冷静に（落ち着いた気分）、そして客観的に意義として理解する可能性を奪われてしまう。そして私は、その気分に対応することが出来なくなってしまうのである。

私自身はA君に屈服するというよりは、その場を支配する気分の力に負けてしまう。そして私がA君と同様の気分支配されてしまう。そうした状況では、いくら私が言葉を発しようとも、逆にその言葉はその場の気分を強めるだけで、気分がその場をますます支配することに加担することになってしまうのである。

ここに気分の悪循環が生じる。私が話せば話すほど、その場を重い気分であらしてしまうのである。私の言葉は宙をさまよい、私の言葉は力を失い、私が語れば語るほど、空虚さが空回りをはじめ、その場はさらに重たくなる。そして私自身がいたたまれなくなっていることに気づく。

このエピソードからは、気分がA君を超えてその場を支配し、そしてその場にいる他者に共有されるものであることがわかる。A君の気分は、けっしてA君の内面領域に閉じ込められたものではない。気分は伝染するのである。

Bさんが部屋を出ていったのは、新聞づくりの是非や私とA君とのやりとりの内容とは、もはや関係がない。Bさんは、A君によって気分づけられた空

間そのものに支配されることに耐えられなくなり、部屋を出ていったのであろう。Bさんに影響を与えたのは、言葉の意味する内容（意義）ではなく、その言葉にまわりついた気分なのである。A君によって気分づけられた空間において、普段は非反省的に留まっているBさんが存在しているという事実が端的に開示されてしまい、その結果、Bさんはその場にいたたまれなくなってしまう。Bさんは存在の重みに耐えられなくなったと言ってもよいだろう。

もともとBさんは、A君とは異なる気分を生きていた。だがA君の気分はBさんに伝わり、Bさんの気分はA君の気分によって変化してしまう。こうしてある気分（Bさんの気分）は別の気分（A君の気分）によってとって代わられる。

もちろん、Bさんを支配した気分が、A君の気分とまったく同じ気分かどうかは確かめようがない。だが、A君の気分によってBさんの気分が別の気分にとってかわられてしまったこと、そしてその気分がA君の重苦しい気分と重なる気分であったことは確かである。気分は、「共なる気分」となるのである。

しかも、その気分は重い気分であって、Bさんはその気分耐えられず、またそうした気分の支配する空間に耐えられず、部屋を出て行ってしまった。ここには、自らを支配する気分を自らの意思によって変えることはできないことが示されている。気分を変えようとその気分に向き合えば向き合うほど、その気分によって支配されてしまう。Bさんのしたように、当の気分から解放されるためには気分の支配する場から出ていくこと、つまりは気分から目を逸らすことが必要なのである。

もちろん、すべての気分がこれほどの支配力をもつとは限らないように思う。A君の気分がそれほど重い気分ではなく、もっと軽い気分だったとしたら、ここまでBさんがA君の気分支配されることはなかっただろうし、部屋を出ていくこともなかっただろう。

また、場を支配する気分が高揚する気分であったならば、Bさんはその気分に入り、子どもたちの集団全体が高揚した気分に入れられるということになったかもしれない⁷⁾。

このエピソードは、気分は個人の内面領域に閉じ込められたものではなく同じ空間を生きる他者に共

有されうるものであることを示している。その空間を生きる者にとって、その空間を生きながらその気分を拒否することはできない。すなわち空間に漏れ出た気分は聴き従うことを求めるのである。A君にとって気分づけられてあることは、一つの「わたしであること」であるが、それはA君だけの「わたしであること」にとどまることなく、Bさんや私や、他の子どもたちの「わたしであること」として引き受けられてしまうのである。つまり「わたしであること」は気分を媒介に「わたしたちであること」へとつながっていくのである。

そして気分の強めあいということがここに生じる。気分が内面領域から空間に漏れ出していき、他者の気分をも支配し始めると、その他者の気分がまた内面領域から漏れ出すことになり、その気分はより支配的な気分として空間を色づけるようになる。

したがって、そこに多くの他者がいればいるほど、気分は「共一気分」、「共情状況性」として空間を強く支配するようになり、その空間を生きる他者を強く気分づけることになるのである。そしてその気分から免れるためには、その空間を生きることをやめなければならない。その空間に生きながら気分が自らの内に流れ込んでくることを、つまり気分聴き従うことを拒否することは困難なのである⁸⁾。そして気分の支配は、Bさんが部屋から出ていかなければならなかったことが示すように、自己存在を揺り動かすような大きな力をもっている。

(2) 「伝達」としての気分

このエピソードをもう少し深く理解するために、ハイデガーの「語り (Rede)」及び「語り」の「伝達 (Mitteilen)」という概念を援用して考えてみよう。

ハイデガーは、了解可能性の分節化を「語り」と名づけている。「世界内存在の情状的了解可能性は、語りとして自らを言表する」(SZ161⁹⁾)。ハイデガーは、こうした「語り」の構成要素として六点を挙げているが、そのなかで「語り」においては「語られたもの」が「伝達」されること、さらには「語り」は、「語られたもの」を伝達すると同時に「自らを言表する」という特徴をもっていることを述べている。

それでは、A君の「語り」においてはいったい何

が「伝達」されたのであろうか。

「伝達という現象は、すでに陳述の分析のさい暗示されたように、存在論的に広い意味において解されなければならない」(SZ162)。ハイデガーは伝達という言葉が常識的に使われる意味とは異なった意味で捉えようとする。ハイデガーによれば、「この実存論的に原則的に解された伝達において、了解しつつある相互共存在の分節化が構成される」(SZ162)。ハイデガーによれば、伝達とは単に情報が一方から他方へと移行することではなく、私たちが「相互共存在」であることと深くかかわっているのである。

「相互共存在」とは、私たちが生きている場において、他の人々と互いに存在しあっているということであり、人がまずは一人で存在していて、その後には他者と共に存在するというのではなく、まずは他者とともに存在しているということを意味している。伝達が可能になるのも、人が「相互共存在」だからなのである。

ここで取り上げたエピソードも、私たちが「共存在」として、もともと他者と共にあるということをはっきりと示しているように思える。ハイデガーは言う。「『感情移入』は、共存在をはじめて構成するのではなく、共存在を根拠としてはじめて可能であり、感情移入が不可避的になるのも、共存在の欠損的な諸様態が優勢であることによって動機づけられているのである」(SZ125)。気分が共有されていくことは、私たちが「相互共存在」であることから生じると考えるとよく理解できる。そして「感情移入」によって他者を理解することは、むしろこの「共存在」の欠損的な様態なのである。ハイデガーは、「そうした伝達が、共情状況性と、共存在の了解内容を『分かち』ことをなしとげる。伝達は、たとえば見解とか願望とかという諸体験を、一方の主観の内面から他方の主観の内面へと運びこむといったようなことではけっしてない。共現存在は、共情状況性と共了解とのうちで、本質上すでにあらわになっている」(SZ162)と述べているが、気分の伝達においてもまさにこのことが言えるのである。

A君は、新聞づくりは嫌だと言う。そしてその言葉にはA君の気分がしみ込んでいる。そしてその気分はA君の言葉以前に彼の身体全体からその場に漏れ出てきているといった特徴をもっている。言葉と

して文字に起こしてしまっただけでは理解できなくなってしまうもの、彼の雰囲気や語り方のなかに込められたもの、そうしたものが場を支配する。

このことは、気分の開示は、言葉が言葉として発せられる以前にすでに語りでありうることを示している。そしてこのエピソードにおいても、A君の言葉はこの語りの根源は言葉の意義よりもその言葉にまわりつく気分であるということを示している。語りにおける了解はつねに情状的了解、つまり気分にまわられた了解なのである。A君は、言葉の意義以前に、うつうつとした世界を語ってしまっている。語りの気分（情状性）がまずもって了解可能な意義全体を作り上げているからこそ、それが、その後、世界の内で言語化され分節化され表明される。

このエピソードにおいては、A君の言葉は単にA君が新聞づくりをしたくないという情報を私や他の子どもたちに伝えるものではなかった。それどころか、その場に伝えられたことは言葉で表現されたものを越えたA君の気分そのものだったように思われる。そのことは何を意味するのだろうか。

ハイデガーは、「世人（das Man）」の支配する平均的了解においては、伝達は、語りが提示しようとしているものとの直接的な出会いを欠くととらえ、そうした語りを「空談（Gerede）」として概念化している。つまり、日常的には、語りの開示する存在者は根源的にはわがものとされえないのである。そして存在者との原初的関係を離れた語りの内容は、語り広められ、薄められていく。

だが、このエピソードにおいては、A君の言葉は単に情報として処理されることはなかった。その意味で語り広められたり、薄められたりすることなく伝達されたと考えることもできる。そのことを二つの視点からとらえることができるように思う。

一つは、ハイデガーのとらえる語りの表明にかかわる点である。ハイデガーは次のように言っている。「何かに関してのすべての語りは、語られたその語りの内容という点では伝達するのだが、同時に、おのれを言表する（Bekundung）という性格をもっている。語りつつ現存在はおのれを外へと言表するのである」（SZ162）。語りは、語られることによって了解内容を共に分かち合うのだが、語り自身は、その語り方等によって気分として表明され、そしてこうして気分として表明されたものがその場にいる

者たちによって共有される。「伝達」されるのは言葉としての意義だけではなく、同時にそこに表明された気分をも含むのである。

すでに述べたが、ハイデガーの思索により、言葉の意義よりもより根源的に気分が共有されることがありうるということが理解できる。「というのは、現存在が差しあたって『内面』として外部に対しておおい包まれているからではなく、現存在が世界内存在として了解しつつすでに『外部』に存在しているからである」（SZ162）。

A君は、世界内存在として、けっして内面領域に閉じ込められた存在ではなく、したがって語りつつあるとき、A君の存在は外に表明されており、言葉の意味だけではなくA君の存在が分かち保たれている。その状況はA君の存在がその空間に伸び広がって、その他の子どもたちの存在を呑み込んでしまうかのような状況を生み出す。ハイデガーは、このことを「語りには情状的な内存在の表明が属している」（SZ162）と述べている。

さらにハイデガーは、表明の言語上の指標として、「音声の抑揚や転調のうちに、語り方のテンポのうちに、『発言の仕方のうちに』ひそんでいる」（SZ162）と言う。たしかにA君の場合にも、その語りのテンポや抑揚の取り方によってA君自身の存在が表明されていたと考えることができるだろう。そしてその表明がA君の内面領域に閉じ込められていないものだからこそ、私やほかの子どもたちを直接に支配するような意味をもったのである。ハイデガーは、情状性の伝達を詩という語りの固有な目標になりうるととらえているが、まさにA君の語りは詩が直接に私たちの存在に訴えかけてくるのと同様に私たちの気分訴えてくるものだった。

ハイデガーは、語りを構成する要素の一つとして「聞くこと」や「沈黙」を挙げているが、上記のように考えてみると、「聞くこと」が耳で聞くことを超えていることが理解できる。A君の語りの表明をほかの子どもたちが聞いたのは耳だけによってではない。A君の存在をほかの子どもたちの存在が身体全体で聞き取ったのである。

そしてまた私たちが「聞くこと」のできる存在であるということは、「聞くこと」を自由に制御できるわけではなく、「聞くこと」から逃れることができない存在だということも意味しているだろう。

言葉の意義は聞き流すことができる。というよりも日常的には聞き流されることが多い。だが、語りの気分は、むしろ聞き流そうとしても聞き流せないといった性格をもっている。A君の語りがその空間に漏れ出しほかの子どもたちを侵食しようとしたとき、それをほかの子どもたちは自らの意識によって排除することはできなかった。むしろ支配されまい、支配されまいと意識すればするほど、その気分に支配されてしまうという逆説的な状況が生じたのである。

この点についてハイデガーは次のように言っている。「現存在というものは、現事實的には、知識や意志でもって気分を支配しうるし、支配すべきであるし、支配しなければならないということ、このことは、実存することの或る種の諸可能性においては、意欲や認識のなんらかの優位を意味するかもしれない」(SZ136)。だが、「気分において現存在は、すべての認識や意欲以前に、また認識や意欲が開示する射程を越えて、おのれ自身に開示されているのである」(SZ136)。

しかもそのうえ、「われわれが気分を支配するといっても、けっして気分からまぬがれて支配するのではなく、そのつどなんらかの反対気分にもとづいて支配するのである」(SZ136)。気分を意識によって支配しようとするとき、人はその気分にこだわってしまう。気分はそうしたとき、さらに私たちの存在を呑み込んでしまうのである。もしその気分から免れようと思えば、その気分からできるだけ離れ、別の気分（反対気分）のなかに生きようとするのが求められることになる。

エピソードにおいては、A君は新聞づくりをしたくないと述べながら、そこに気分を表明していた。しかしその場にいた私はA君の言葉の意義にこだわってA君を説得しようとした。だが、A君の言葉において伝達されていたことはA君の気分そのものだったのである。A君の言葉の意義に私がこだわればこだわるほどA君の気分は重くその空間を支配するようになる。その気分に私も支配され、私はその重たい気分を何とかしようとするのだが、その手段として、さらに言葉の意義にこだわってしまう。その結果、Bさんが耐えられなくなって部屋を出てしまうほどに空間を重い空気にしてしまったのである。

新聞づくりを誘っていたとき、私の意識としてはA君の思いにできるだけ寄り添いたいと思っていた。それにはA君の考えをできるだけ聴いて、そのうえで私の考えをわかってもらい、A君に納得してもらいたかった。ところが、私は、表立っては、言葉の意義にこだわり、彼の存在から漏れ出ていた気分に応じよう（聞き従おう）とはしていなかった。

だが、一方では、私自身もその気分に支配されていた。ということは、私は彼の気分を聞きとっていたことになる。私は表立ってはA君の気分に聞き従おうとはしなかったが、根底では彼の気分に従属させられ、その場が重たい空気に支配されていくことに焦っていった。だが「どうにかしなければ」と思えば思うほど、A君の言葉の意義を受け止めようとしてしまっていた。彼の存在に寄り添おうとすればするほど、実際にはA君の存在から離れていたことになる。

ハイデガーは、気分が、「重荷を負っているという現存在の性格」(SZ134)を開示するという。そして「認識が開示しうる諸可能性のおよぶ範囲は、気分の根源的な開示とくらべれば、あまりに狭小である」(SZ134)とも言う。気分は、認識以上に、私たちの世界を開示する。A君の気分は、世界をその気分に即して色づけてしまうと言ってもよいかもしれない。そしてA君の気分が存在の重荷と深くかわっていたからこそ、Bさんは、その重荷に耐えられず部屋を飛び出していったと考えることができるだろう。気分の持つ開示の作用は世界をも開示し、規定してしまうのである。

さらにハイデガーは「<たんなる気分>こそ現をいっそう根源的に開示するのだが、しかしまたそれに応じて、あらゆる無知覚よりも現をいっそう執拗に閉鎖する」(SZ136)と言っている。そして、とくに「不機嫌な気分（Verstimmung）」を挙げている。「不機嫌な気分においては、現存在はおのれ自身に対して盲目になり、配慮的に気遣われた環境世界はヴェールをかぶり、配慮的な気遣いの配視は誤り導かれる」(SZ136)。

たしかに、世界は知覚しないことによって隠されてしまう。だが、知覚しないこと以上に不機嫌な気分のなかで世界は見えなくなってしまうのである。エピソードにおいて、子どもたちの世界そのものが隠されてしまうということが生じていたのではない

だろうか。だからこそ、私は気分を反対気分（明るさ）によって変えることができ初めて、A君や他の子どもたちの認識に訴えかけることができたのではないだろうか。

Ⅲ 自己形成の場と雰囲気を感じ受するという事

(1) 気分を感じ受と「公共性」

これまでのエピソードの考察をとおして、そもそもフリースクールの子どもたちが「公共的存在」であることが見えてきた。日常的には、彼らは、フリースクールで気ままに思いのまま生きているように見える。A君もBさんも、学校のように縛られず自由を許されるフリースクールにおいて自分の思いを大切に生活しているように見えた。フリースクールに通う子どもたちの多くは学校生活では自分の思いを抑圧されてきたと感じていて、それに耐えられなくなってフリースクールへとやってくる。その意味で、新聞づくりを執拗に誘う私は、彼らにとってまさに教師のような存在だったのであり、A君が、それに反発を感じたことは、フリースクールという場所のもつ意味から、よく理解できることでもある。

だが、A君の言葉が、その意義を超えて気分として空間を支配したということは、場の雰囲気のほうが子どもたち一人一人の個人の主体的行動に先立っていることを意味している。子どもたちの自由に見える言葉は、その言葉の意義という観点からは、個の集団に対する優越性を示しているように見えるが、気分の伝達という観点からは、集団的な場の力のほうが個に対して優越性をもっていることを明らかにしている。子どもたちは日常的にはこの気分支配されないよう、とくに重たい気分支配されないよう、気遣っているだけなのである。

フリースクールの子どもたちを離れて少し一般化してみよう。「はじめに」で述べたように、子どもの規範意識の低下、及び公共性の喪失が指摘されるが、気分の観点から考えると、むしろ彼らが個よりも集団的場を生きていると言える側面を強くもっている可能性が示唆される。いくら彼らが個を強調しても、その裏側では気分によって支配される危険性を抱えているのである。それは、子どもたちの他者関係が同調と風景化に彩られていることと深くかわっているだろう¹⁰⁾。

したがって子どもたちの個を育てるためには、論理的な理性の力を育てるだけでは十分ではないかもしれない。気分を制御する能力を育てることが求められるように思う。少なくとも、私たちの存在が気分によってコントロールされているのだということ、どんなに客観的で理性的に思われる判断の内にも気分の支配が働いている可能性があることを理解することが求められているのではないだろうか。

(2) 自己論としての気分

このエピソードは、また、「わたし」であることの根底に「わたしたち」があるのではないかということを用意させる。「わたしたち」は、個の意識の集合でできているわけではない。つまり個がはじめにあって、その後に集合意識が生まれるとは限らないことをエピソードは示しているように思われるのである。むしろ「わたしたち」が「わたし」を規定している側面がある。自己は「わたし」と「わたしたち」の往復運動のなかに成り立っているのではないだろうか。

それは、ハイデガーの概念を用いれば、私たちが「世界内存在 (In-der-Welt-sein)」であるということだろう。だからこそ、私たちにとって「間」が重要な意味をもっている。「間」にこそ自己が存在するのである。すでに述べてきたように私の内面領域に自己を閉じ込めることはできない。そして気分の解明からは、この「間」を仲立ちしているのは、言葉の意義よりも言葉のテンポや抑揚といった身体に働きかける側面なのである。この意味で、身体は自己に内在する「わたし」と「わたしたち」の両義性を媒介しているのである。

そしてまた自己がわたしの思い通りになるとはかぎらないことも、このエピソードは示している。最も「わたし」の自由になると考えられている「わたし」の存在が、実は「わたし」のコントロールを超えているのである。それは、「わたし」の根底に「わたしたち」が根を張っているからである。この意味で「わたし」は「わたし」の最も近くにあるように見えて、最も遠い存在だということもできるだろう。

また私たちが大人になっていく上での課題が「わたし」が個として自立していくことだとしても、その自立は「わたしたち」と「わたし」との対立的共存を生きることができるようになることを含んだ自

立てなければならないだろう。

そう考えると、フリースクールは、まさに「わたし」と「わたしたち」をどう調整するかを学ぶ場だということもできるだろう。フリースクールでは、学校ではなかなか顕在化しにくい、「わたし」と「わたしたち」の対立的共存が場のテーマになりやすいのである。この意味でフリースクールでは、いつも他者との融合の駆け引きが子どもたちの課題になっているということもできるだろう。「わたし」の存在は、秘密の内に保持しえないのであり、子どもたちは、他者の眼差しに晒されてしまっているという現実に直面し、そこから逃げ出したり、そこに溶け込んだりしながら生活しているのである。

おわりに

フリースクールの子どもたちは、学校における集団生活の息苦しさからの解放を求めてフリースクールにやってくる。その意味で、個を取り戻しにやってくるのである。だが、上記の解明において、彼らが雰囲気の影響されやすい存在であることがわかった。子どもたちは個を求めるいっぽうで、他者と融合するような関係をフリースクールに求めているのではないか。だからこそ、気分に支配されやすいのではないだろうか。

このことから、そもそも人間の個がそれほどあてになるものではないこと、「わたし」といったものは絶対的なものではないことが予期される。もしかすると「わたし」よりも「わたしたち」のほうが、より根底的な自己を構成しているのではないだろうか。主観性が関主観性を成立させるのではなく、むしろ間主観性が主観性を成立させているのではないだろうか。

それと同時に、重たい気分の重要性も示唆される。気分の共有が、祝祭的気分のように一体化を促進する気分だけではないことは、むしろ祝祭的気分のなかで集団心理に支配されていくことを防ぐためにも大切な意味をもっているのではないだろうか。また重たい気分が個を個として析出することを可能にするとするならば、個の自立のためは、重たい気分は重要な役割を果たしていることになる。重たい気分は一概に否定されるべき気分ではない。

こうした点について明らかにすることは今後の課

題にしたい。

注

- 1)「自己の肥大化」や「自己中心性」という概念は括弧つきで使いたい。子どもたちを見ていると、本文でも述べたように、彼らの自己形成は困難になってきているように思われるからである。「自己の肥大化」や「自己中心性」は他者の喪失との関係では理解できるが、それは自己形成に結びつくものではなく、むしろ逆であるようにも思われる。自己は他者との出会いによって形成されるものだからである。
- 2)そう考えると、たとえば学級崩壊を起こした学級の子どもたちにとって、もっとも問題なのは、騒がしくて学級経営が成り立たないことではなく、他者とのかわりのなかで伸びやかな自己を形成する機会を奪われてしまうことなのだということになるだろう。
- 3)私自身も、いくつかの論文でこの点について考えてきた。生越達、2002、「子どもたちの居場所についての一考察―内と外の境界に注目して―」、『生活指導研究』第19号、生越達、2003、「子どもたちの多元的自己と同調：新しい物語創造の可能性を探って」、『教育方法学研究』第29巻、生越達、2003、「自己にとっての公共性の意味：哲学的人間学に基づいて」、『生活指導研究』第20号、生越達、2005、「気分における『公共性』と『わたし』」、『生活指導研究』第22号など。
- 4)そのフリースクールは一般の住宅をそのままフリースクールとして用いていて、主に二部屋、また特に必要があるときには三部屋が使えるようになっている。一つは大きなダイニングキッチンであり、子どもたちは多くそこで過ごしていた。また特に勉強をしたい子どもたちや音楽活動のための部屋が別に用意されていた。
- 5)通信制高校では、自習してレポートを仕上げるという課題があり、子どもたちはフリースクールでそれをやるが多かった。
- 6)なぜ、A君はそんなに新聞づくりを嫌がったのだろうかと考えてみると、彼が新聞づくりを嫌いだったことのほかに、私があたかも教師のように子どもたちに指示を出して無理やり活動させようとしたことが関係しているだろう。いく

ら私が柔らかに促そうと、そこに指示する人―指示を聞き入れる人といった関係が成立していたことは確かである。こうした視点からこのエピソードを見てみることも必要かもしれない。ただし、本論の趣旨からしてこの点にはこれ以上触れないことにする。

- 7) 実際に、ひとりの子どもの高揚した気分が場を支配するといったことはフリースクールでは時折生じることである。
- 8) こうした気分の支配力についての考察は、たとえば、ある宗教団体のなかで生活することによって、その場の雰囲気支配されてしまうようになることと類似的に考えることができるように思う。いくらその雰囲気に抗して影響されないでいようと意識しようと、気分＝雰囲気力は、自己の中に流れ込んで、自己を支配するようになる。しかも宗教団体のなかでは気分は相互に強められ、雰囲気＝気分は非常に強い支配力をもっているように思われる。やはりそうした気分から自由になるには、その場を離れることが必要である。
- 9) ハイデガーの *Sein und Zeit* からの引用については、SZ ページ数で示すことにする。
- 10) 気分支配されやすいことは、理性を超えた雰囲気によって一定の価値観へと、しかも熱狂的な気分をとおして誘導されてしまう危険性を予見させる。

引用文献

Heidegger, M. 1926 *Sein und Zeit*, Max Niemeyer ; SZ